

歴史服実物資料のトワルを通して見た19世紀女性ファッション

能澤 慧子* 菅野 ももこ** 長谷川 希***

A Study on the women's fashion of 19th century
as seen through the toile of historical original dress

Keiko NOHZAWA Momoko KANNO Nozomi HASEGAWA

はじめに

歴史服実物資料は図像資料、文字資料と並んで、服飾史研究の重要な資料の一つである。歴史上の衣服の材質、色彩、細部の装飾や技術などに関して、実物資料は図像や文字では充分には持ち得ないリアリティを有しており、近年これらの面に焦点を当てた文献の出版も相次いでいる¹⁾。また実物衣装の構成についても早くから調査が進められ、歴史服のパターンや縫製方法に関する調査の成果を公刊した例も少なくない²⁾。しかしながらこれらの文献は、歴史服のレプリカ製作、舞台衣装や仮装舞踏会衣装の製作には有用な情報を含んではいるが、それらが製作された時代の流行の特徴を形成する因子としての位置づけを明確にするような考察は必ずしも充分にはなされていない。

本研究はこうした実情に鑑み、実物衣装のパターンによりトワルを組み立て、ボディに装着させることによって、その歴史服実物の時代のファッションの特徴の構成に、裁断法や縫製技術などが、具体的にどのように係ったのかについて、解明を試みるものである。

本研究の第1部として、東京家政大学服装史研究室管理の歴史服実物資料の一つ、1865年ごろイギリスで製作されたウェディング・ドレスを取り上げることとした。この衣装、ないしはこのレプリカをボディや生きたモデルに装着させ、同時にそのパターンを調査することにより、19世紀女性ファッションの特徴が理解できるものと推測される。しかしながら本品は極めて小さく、実際に装着できるモデルやボディを見出すことは困難である。

そこで上述の19世紀の実物衣装の調査に基づいたパターン研究書から、このウェディング・ドレスとほぼ同時代に製作され、デザインの酷似した作品を選び、そのトワルを製作・装着し、調査・観察し、そこで得られた情報に関して、上記実物ウェディング・ドレスと関連付けて考察することにした。

また本稿は、表題の研究の第1段階における内容を扱っており、袖を含む上半身部分（ボディス）を中心的対象としている。

*服飾美術学科 服装史研究室 **環境教育学科 情報科学研究室 ***家政学研究科 被服造形学専攻

I. 1865年頃ウェディング・ドレスの調査

1. デザイン

白絹サテン製。ボディス部分とスカート部分、垂れ飾の3部分からなる。ボディスは前開き、衿無し。身頃、袖口、スカート、垂れ飾にチュール・レースとサテン・リボンのルーシュ。

着装した際のスカートはやや後方にボリュームが多く、ウエストにベルトで巻いて後方に垂らす垂れ飾からも、バスル・スタイルへの移行を暗示する1860年代後半のデザインと推測される。

2. 測定とパターンについて

測定結果は以下の通りである。

| | | |
|------------|----------|-----------|
| (1) 仕上がり寸法 | 胸囲 | : 84.0cm |
| | ウエスト周り | : 60.8cm |
| | 背丈 | : 36.5cm |
| | 袖丈 | : 52.0cm |
| | スカート丈(前) | : 105.0cm |
| | (後) | : 150.0cm |

(2) 特徴

1) 着用者の身長：背丈とスカート丈（後方は花嫁衣裳ということもあり、引き裾にして着用したと思われるが、当時のファッション雑誌などから、前側は床丈と推測される）の和141.5cmに頭部の長さを加えて、着用者の身長は、およそ164.0cm前後と見られる。

2) ボディス丈とスカート丈のバランス

現代の普通サイズでは、背丈は38.0cm前後が多い。これに比べると、本品はややハイウエストに作られていると思われる。

3) ボディスの胸囲とウエスト周り

どちらも運動による身体の変化を見越したゆとり分をどの程度とったかによるが、現代の標準では相当小さい部類に入る。

4) 衿ぐり寸法

パターン上での衿ぐりは小さく、実際に計測すると26.0cmであり、成人女性の衣服としては極端に小さい。

5) 縫合線の位置：肩と脇の前後の縫合線が後方にずれており、現代服とは大きく異なっている。

3. 計測とパターン上の特徴の解明方法

(2) に挙げたパターン上の特徴が、実際に着用した場合にどのような効果を生み出すのかを明らかにするためボディへの着装を試みたが、通常の標準的洋裁用ボディには首周り、ウエスト、バストが窮屈であり、着装は不可能であった。そこで、本品とほぼ同時代に製作され、デザインも類似し、なおかつボディへの着装可能な実物衣装のパターンを文献中に求め、そのトワルの着装を試みることにした。



図1 作成したトワルのもととなったドレスのイラスト

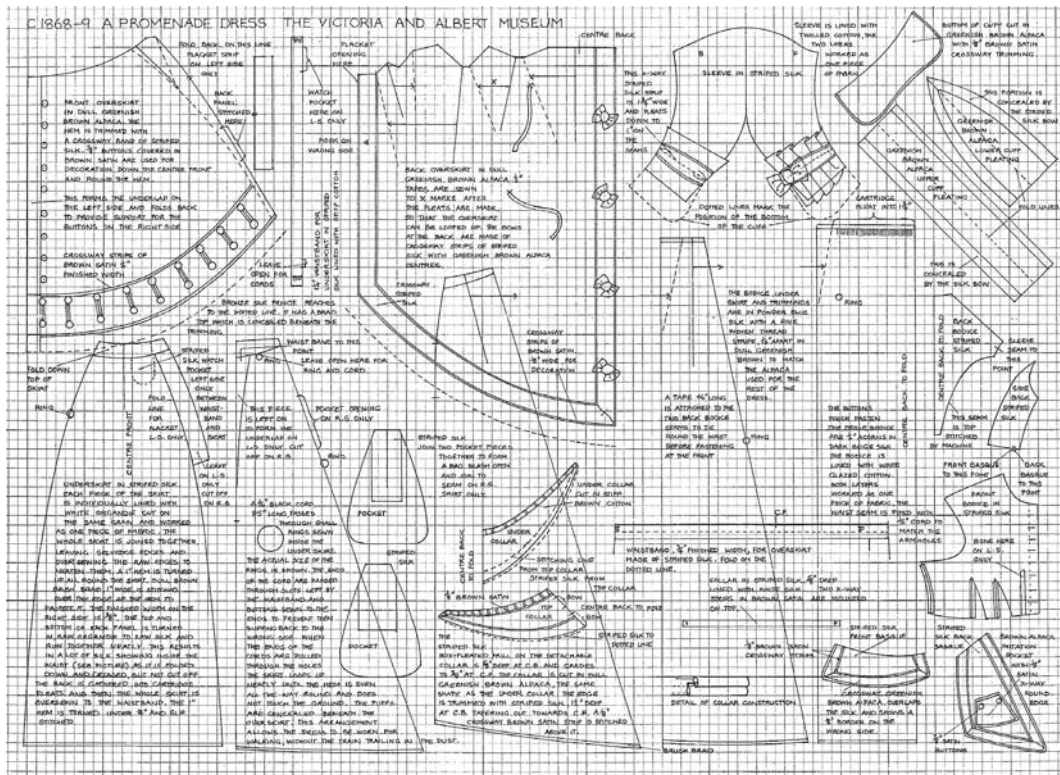


図2 作成したトワルのもととなったドレスのパターン

II. 文献掲載パターンを用いた試み

1. 文献掲載パターンを用いたトワルの着装

1) 方法

表1

| ボディ | |
|------|---------------------|
| 名前 | 東京キイヤ |
| サイズ | Ladies'size 78 (7号) |
| バスト | 78.0cm |
| ウエスト | 58.5cm |
| ヒップ | 85.5cm |
| 肩幅 | 36.0cm |
| 首周り | 33.0cm |
| 胸幅 | 約 32.0cm |
| 背丈 | 36.0cm |

1860年代後半の女性服と現代の女性服の形態の差異を明らかにするために、ジャネット・アーノルド編『ファッションのパターン2 イギリスの女性服とその構成 1860-1940』³⁾に掲載されている1868~69年頃製のドレスのパターン(図1, 2)を元にトワルを製作し、現代のドレーピング用ボディ⁴⁾への着装を試みた。(図3, 5)

本実験のために製作したドレスは、背丈が14インチ(約35.6cm)、スカート丈が42インチ(106.7cm)であり、第7頸椎から頭頂部までを25.0cmと仮定すると、身長約170.0cmの人物が着用していたと推測される。ボディの裾周り寸法は63.0cmで、しかも背丈が短く、ウエスト部分は63.0cmよりも小さいことが想定されるため、着装にはウエストサイズ58.5cmの7号サイズのボディを使用した(表1)。なお、ボディの各線(ネックラインは除く)は、トワル上に黒いボディテープで示した。



図3 トワル(前身頃)



図4 ヌードボディ



図5 トワル(後身頃)

2) 結果(図6, 7)(表2)

- ① トワルの肩線は、ボディの肩線より後ろにずれている。(図6 a-c, b-d)
- ② トワルの脇線は、ボディの脇線より後ろにずれている。(図7 f-h, g-i)
- ③ トワルの後身頃のネックラインは、ボディのネックラインより高い。
- ④ トワルの袖山中心点は、ボディのショルダーポイントより下がっている。(図6 c-e)
- ⑤ トワルのボディの裾は、ボディのウエストより位置が高い。(図3, 5)

- ⑥ トワルの衿の位置の高さに加え襟ぐり寸法が打ち合わせ分（2.5cm）を含め37.0cmと狭く、着装時、ボディとの間にゆとりは殆ど見られず、衿付け線は、ボディのネックラインよりも高い位置を通る。
- ⑦ トワルの肩線はネックポイントaに接触せず、袖山までほぼ直線で結ばれており、図4のヌードボディと比較すると、傾斜が急である。
- ⑧ 袖の形態は、肘のあたりから大きく湾曲しており、脇に垂直に降ろした際に皺が出来た。

表2

| ボディとの比較 | |
|--------------|----------------------------|
| 肩線 | 0.6cm(a - b), 4.5cm(c - d) |
| 脇線 | 6.0cm(f - g), 4.8cm(h - i) |
| 衿付け位置 | 1.9cm(ネックラインの前中心) |
| | 3.4cm(ネックラインの後ろ中心) |
| 袖山 | 2.5cm(c - e) |
| ウエストからボディスの裾 | 3.0cm(前中心), 1.0cm(後ろ中心) |

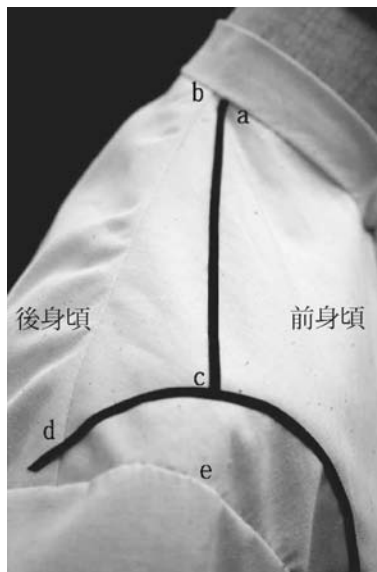


図6 ボディの肩線・袖山との比較



図7 ボディの脇線との比較

2. パターンの比較

1) 方法

トワルを用いて着装実験を行った結果、製作したトワルが現代の衣服に比べて肩線と脇線の後方へずれ、トワルのネックラインの後部分が現代のネックラインよりも高い位置にあること、及びウエストラインがボディのそれよりも高い位置にあるなどの特徴的な形態であることが分かった。そこで、平面上での検証を行うため、トワルのパターンと現代の衣服のパターンの比較を試みた。(表3.4) 現代衣服のパターンとして、文化式原型のSサイズ(7号)を用いた。

表3

| 文化原型 (7号) | |
|-----------|--------|
| バスト | 78.0cm |
| ウェスト | 62.0cm |
| 背丈 | 38.0cm |
| 衿ぐり寸法 | 37.2cm |

表4

| トワフル寸法 | |
|---------|---------|
| 前中心線 | 29.0cm |
| 後ろ中心線 | 36.8cm |
| 衿ぐり寸法 | 34.5cm |
| 衿幅 | 約 2.0cm |
| 肩線 (前) | 17.3cm |
| 肩線 (後ろ) | 19.0cm |
| 胸囲 | 85.5cm |
| ウェスト | 63.0cm |
| 袖ぐり | 21.7cm |
| 脇線 | 14.0cm |
| 後ろ切り替え線 | 26.7cm |

文化式原型とトワフルのパターンを1/2サイズに縮小し、前中心線、後ろ中心線を重ね、上下の位置関係については、1.で行った実験結果を基にした。文化式原型の背丈が38.0cmであり、7号サイズのボディの背丈が36.0cmであるため、トワフルのパターンの裾を文化式原型のウエストラインから2.0cm上にラインを引き、そこから更に前身頃は3.0cm、後身頃は1.0cm上に配置した。(図8, 9)

本実験では、1.の実験結果を踏まえ、以下5箇所の検証を行った。

- ① 肩線
- ② 脇線
- ③ ネックライン
- ④ 袖山
- ⑤ 着丈

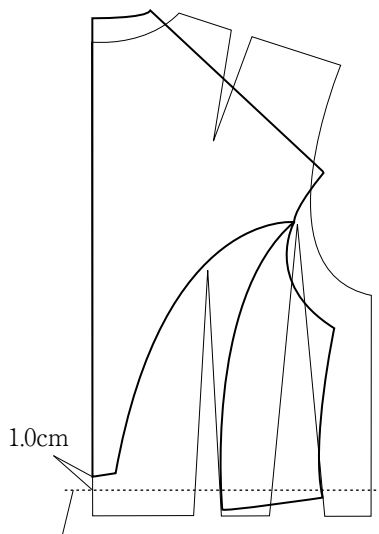
2) 結果

トワフルのパターンと、文化式原型のパターンを前身頃、後身頃ごとに比較した結果、以下の結果が見られた。

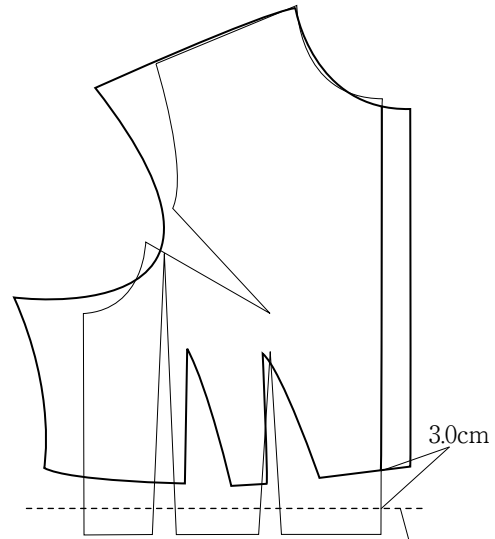
- ① トワフルの肩線は、文化式原型に対して前身頃は平行。後身頃は傾斜が急。
- ② トワフルの脇線は、文化式原型より前身頃は外側。後身頃は内側。
- ③ トワフルの前のネックラインは、衿側で後方への0.6cmの繰り越し分が加わるため文化式原型とほぼ一致する。
- ④ トワフルの後のネックラインは、文化式原型より位置が高い。
- ⑤ トワフルの肩先は、文化式原型のショルダーポイントより前身頃、後身頃共に位置が低い。
- ⑥ トワフルの背丈は、文化式原型より前身頃、後身頃共に短い。

本実験によって、II-1-2)の立体での実験結果から見られた特徴を平面上で、より明らかに出来た。

— トワルのパターン
— 文化式原型Sサイズ(7号)



7号ボディのウェスト・ライン
図8 パターンの比較 (前身頃)



7号ボディのウェスト・ライン
図9 パターンの比較 (後身頃)

3. 組み立てた紙製パターンの比較

1) 方法

次いで、2. の実験で、平面上で特徴的な形態が見られた肩の傾斜が、立体ではどのようなものか进行明らかにするために、トワル作成に用いたパターンと文化式原型（いずれも紙製）をそれぞれ組み立てて、両者の肩傾斜角度の比較を試みた。（図10, 11）

2) 結果

肩の傾斜を測定した結果、文化式原型が 20° であるのに対して、トワルのパターンは 36° であった。（表5）

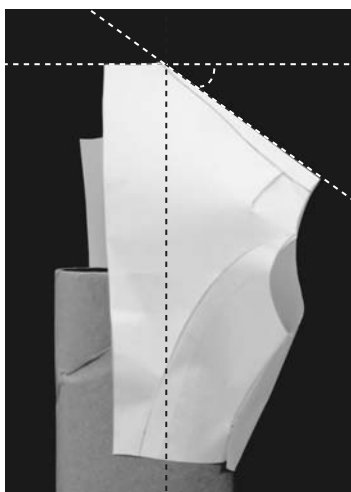


図10 肩の傾斜の比較
(トワルのパターン)

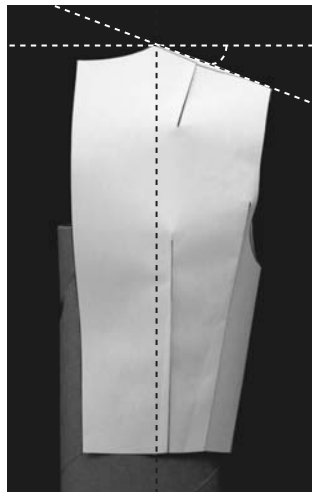


図11 肩の傾斜の比較
(文化式原型)

表5

| 肩の傾斜の比較 | |
|---------|------------|
| 文化式原型 | 20° |
| トワル | 36° |

Ⅲ. 考察

Ⅱ-1.2.3.の実験の結果、トワルの特徴は、以下の5項目に分けることが出来た。

1. プロポーション

背丈の短さに加え、ネックラインの高さによって、ウエストの位置が高く、上半身が実際より上に持ち上がっていることが分かった。または、そのような視覚的効果を狙っていたと考えられる。

2. ネックラインと肩線

Ⅱ-1.-2)-⑥では、衿ぐりの小ささが明らかになった。このことにより、肩線は現代よりも高い位置にあるトワルのネックラインから、ネックポイントに接触せず袖山まで直線的なラインで結ばれ、なで肩を強調している。

仮に着用者が本実験で使用したボディよりも首が細い場合、衿は実験の場合よりも低い位置、あるいは現代のネックラインに落ち着くことが考えられる。しかしその場合、背中の上部分と前身頃胸部に横方向のたるみ皺が生じる筈である。本実験ではそうした皺は発生せず前身頃前後、肩線、いずれもきれいな形態が生じており、このボディがおそらく適切なサイズであったことを示している。従って、大なり小なりネックラインは現代よりも高い位置に設定されていたと推測される。そのため、身体と肩の間には図12に見られるような三角形の空間が出来ていたと考えられ、これによって、現代よりも肩傾斜角度の大きい、いわゆるなで肩が演出されている。他方、首周りにゆとりが殆ど無いため、着用者の首または頭部の動きを妨げていたと考えられる。

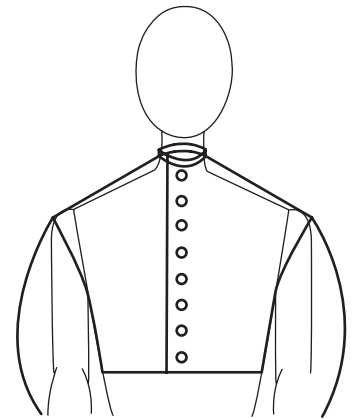


図12 身体のラインとトワルのライン

3. バックスタイル

肩線、脇線共に、本来の身体のラインよりも後ろよりに引かれていることから、前後の身幅の差が大きく、後身頃の背幅が非常に狭いことが分かった。ここから、バックスタイルを美しく見せる効果を狙っていたと考えられる。後ろ切り替え線に加え、脇線も後ろよりにあることで、ウエストに向けてボディが細く見えるデザインであると言える。

4. 袖山の位置

袖山はボディの腕付けのラインから2.5cm下がった位置にあり、いせ込みも殆ど入っていない。そのためこのボディは、着用者は、上方、外側、後方への腕の動きを制限されていたと推測され、機能的ではなかったと考えられる。



図13 腕位置を調節したトワル（前身頃）



図14 腕位置を調節したトワル（後身頃）

5. 袖の形態

袖は、肘の辺りから大きく湾曲した形態であるため、着装し、腕を脇に垂直に降ろした際、皺が寄り、美的とは言えなかった。そのため、何か特定の姿勢を取った時に形が整うデザインなのではないかという仮説を立て、前身頃の中心に腕を向けたところ、皺が寄らず、前後どちらから見ても美しい形態になった。このことから、トワルの袖は、身体の前方の中心よりに向けて静止した状態を基本としたデザインであると考えられる。（図13, 14）

6. 身体のライン

トワルはフラットな状態で広げると、袖から肩、衿へと半円を描いた様に見え、どこまでが肩でどこからが腕であるか定かでない。つまり、身体の各部位を明確に示すラインがトワルには見受けられない。こうした形態の特徴は、ボディスを着用した際に、身体を人工的に作り変える役割を果たしていたと考えられる。

まとめ

トワルの着装実験結果と考察を当初の研究対象であったウェディング・ドレスに当てはめてみると、衿ぐりが極めて小さいのは、衿ぐりのラインが現代のパターンよりも高い位置にあることを意味し、このため、この差の分だけボディスが低い位置に着用されることになる。着用者のヌード寸法が不明であるため具体的数値を割り出すことは不可能であるが、その数値分、ボディスの丈が短くなることになる。

このことから着用者の身長に関して、当初の推測値よりも衿位置の高い分、減じる必要があることになり、すなわち着用者は身長160.0cmを少し超える程度の、極めてほっそりとした女性で、高いウエストラインとなで肩の強調により、上半身は小作りに、そして逆にスカートは長く演出されていたと言えよう。

以上の結果、1860年代後期において、ウェストラインが実際のそれより高い位置に構成されていたこと、衿ぐりが現在の裁断法における位置よりも高い位置にあり、現在のショルダーポイントより下がった肩線に加えて、なで肩を強調していたことなど、管見ではこれまで服飾史関係の文献には記述の見られなかった重大な事実を把握することができた。

謝辞

本紀要の作成にあたり、お忙しい中、着装実験用のボディをお貸しくくださり、また多くのご助言を賜りました、本学教授の山田民子先生に心から感謝申し上げます。着装実験の際にご助力いただきました助手の柏原智恵子先生に、末筆ながら御礼申し上げます。

註

- 1) ・ Wilcox, Claire & Mendes, Valerie, *Modern fashion in detail*, The Overlook Press, New York, 1991
・ Hart, Avril & North, Susan: *Fashion in detail from the 17 th and 18th centuries*, Rizzoli, New York, 1998.
・ Baumgarten, Linda & Watson, John: *Costume close-up, clothing construction and pattern 1750-1790*, Colonial Williamsburg Foundation, Williamsburg, 1999.
・ Crill rosemary , Wearden, Crill & Wilson, Verity: *Dress in detail from around the world*, V & A Publication, London, 2002.
- 2) ・ Arnold, Janet, *Patterns of fashion 2 Englishwomen' s dress c.1860- 1940. and their construction*, Macmillan/ Drama book, London, first published 1966, p.27.
・ Waight , Norah: *The cut of women' s clothes 1600-1930*, Faber & Faber, London, 1968.
・ Burnston, Sharon Ann: *Fitting & Proper, 18th centuries clothing from the collection of the Chester County Historical Society*, Scurlock Publishing, Texarkana, 1998.
- 3) Arnold, Janet, oct.,p .27.
- 4) 株式会社キイヤ製トルソー モデリア ヌードフォーム エッジ38・ファム.

図版出典

1. Arnold, Janet, *Patterns of fashion 2 Englishwomen's dress c. 1860- 1940. and their construction*, Macmillan/ Drama book, London, first published 1966, p.27.
2. Arnold, Janet, *Patterns of fashion 2 Englishwomen's dress c. 1860- 1940. and their construction*, Macmillan/ Drama book, London, first published 1966, p.26.
14. 身体のイラストは、志村萌著『ファッション画 -Fashion drawing technique (ブティック (No.291))』杉野学園ドレスメーカー学院出版局 初版2000年 を参照した。